

Living the Lotus 7

Buddhism in Everyday Life

2024
VOL. 226



立正佼成会プノンペン法座



Living the Lotus Vol. 226 (July 2024)

【発行】立正佼成会 国際伝道部
〒166-8537
東京都杉並区和田 2-7-1 普門メディアセンター 3F
Tel: 03-5341-1124 Fax: 03-5341-1224
E-mail: iiving.the.lotus.rk-international @ kosei-kai.or.jp
編集責任者: 赤川 恵一
編集チーフ: 三川 紗知
校閲者: 小坂 和正、菊池 克之
編集スタッフ: 国際伝道部スタッフ

立正佼成会は 1938 年に庭野日敬開祖、長沼妙佼脇祖によって創立された、法華三部経を所依の經典とする在家仏教教団です。家庭や職場、地域社会の中で釈尊の教えを生かし、平和な世界を築いていきたいと願う人々の集まりです。現在は庭野日鏡会長とともに、私たち会員は仏教徒として布教伝道に励みながら、宗教界をはじめ各界の人々と手をたずさえ、国内外でさまざまな平和活動に取り組んでいます。

Living the Lotus—Buddhism in Everyday Life (法華経を生きる～生活の中の仏教) というタイトルには、日々の生活のなかに法華経の教えを活かして、泥水に咲く美しい蓮の花のように、人生を豊かに、そしてより価値あるものにしていきたいとの願いが込められています。本誌を通じて、世界中の人々に日々の生活のなかで活かす仏教の教えをお伝えします。

私たちの人生と 「永遠のいのち」

庭野日鑑
立正佼成会会長



人生はメドレーリレー

仏の教えをやさしく、わかりやすく説きつづけられた臨済宗の松原泰道師が、
米寿の歳に詠んだ歌があります。

「八十余年亡母に手ひかれ 山を越え／川をわたりて今日をめぐまる」。孟蘭盆にちなんだ講演のなかで、師はこの歌につづけて、「おかあさん、ありがとう。この年まで、こんなに丈夫に生かさせていただいてありがとう——」とお母さまへの思慕と感謝の心情を率直に述べておられます。

孟蘭盆の季節になると、とりわけこのように亡き父母への思いが深まるというのは、来年、この歌を詠まれたときの師と同じ歳を迎える私だけではないと思います。

また、師のご著書にあるつぎの一節も心に残っています。

「人生は、ゴールのないメドレーリレーのようなものです。人間が生きて死ぬというのは、何億年も続いてきた生命のメドレーリレーの一走者として懸命に走り、次の走者にバトンを手渡すことです」（『松原泰道の説法人生』佼成出版社）

生命あるものは、いつか必ず死を迎えます。そして私たちは、自分の生命が尽きるそのときを「人生のゴール」と受けとめがちです。ところが松原師は、人生を「ゴールのないメドレーリレー」だということです。

死を迎えても、そこが生命のゴールではないとも受けとれるこの一節に、私はなんともいえない安らぎを覚えます。走る距離も、走り方もそれぞれに違う人生ですが、だれもがみな、大いなるいのちの営みのなかの一区間を精いっぱい走るリレーの走者で、生命のバトンはそうして永遠に引き継がれる。このように受けとめると、爽さわやかな気持ちにさえなります。

「永遠のいのち」を生きる

京都大学の総長を務められた平澤興^{ひらさわこう}先生は、何億年にも及ぶ生命の営みをより具体的な生命観^{せいめいかん}として示しています。

「死とは、大自然より与えられた生命が、元の大自然にかえり、大自然の一部にかえり、再び大自然の建設^{さんかく}に参画^むする。／これは『無』にかえるのではなく、新しい大自然の創造に参加するのである」（『生きよう 今日喜んで』致知出版社）。

この言葉からは、死を迎える寂しさや悲しさはみじんも感じられません。むしろ私たちの生命は、死を境に過去から未来へとつづく大河のような「故郷」に帰り、大自然^{かえ}に還って、「永遠のいのち」を生きつづけるといった壮大なイメージが広がってきます。

多く人は、やがて死が自分に訪れることを恐れ、不安^{つの}を募らせます。自分がこの世からいなくなるなど考えたくもない、という人もいそうです。ただ、釈尊^{しゃくそん}が真理を探究された動機も、すべての人を生老病死^{しょうろうびょうし}の苦から救いたいとの願いによるものですから、死を避けたいと考えるのは自然な感情ともいえます。釈尊はしかし、その末に私たち人間がそうした苦しみや悩みを乗り越える法として、無常をはじめとした真理にもとづく四諦・八正道の教え——だれもが救われる、苦の受けとめ方と実践徳目——を説き、伝えられたのです。現に、芥子^{けし}の実のたとえで知られる幼子^{おさなご}を亡くしたキサー・ゴータミーは、釈尊に出会って救われたことを「わたしは、八つの実践法よりなる尊^{とうと}い道、不死^{ふし}に至る〔道〕^{じっしゅう}を実修しました。わたしは、安らぎを現にさとって、真理の鏡を見ました」と告白しています。

さて、この告白で気になるのは「不死」という言葉です。釈尊も「経集^{スッタニパータ}」のなかで、心を耕^{たがや}すとその人には「不死の実り」がもたらされると述べておられますが、「不死」とは何を意味するのでしょうか。現実に死と向きあう私たちが、日々を心おだやかに生きる手がかりの一つとして、次号ではこの「不死」について少し考えてみたいと思います。

（『佼成』2024年7月号）



Interview

5月号に続き、2024年3月に立正佼成会 学林を卒林した青年のインタビューをお届けします。

カースト差別と闘う人々と共に、 よりよいインド社会を目指して

インド・ブッダガヤ法座 ヴィシワジート・ゴータマ

学林での2年間を振り返って、最も印象に残っていることを教えてください。

日本に来たばかりの頃は当然のことですが、言葉や文化の違いから戸惑うことが多く、また私は性格的にも緊張するタイプで、人前で話をするのがとても苦手でした。でも、学林では司会などのお役にいただくことが多く、その度に私は不安と緊張に襲われ、「私にはとてもできない」という気持ちになりました。そんな時、講師さんや先輩たちが「ヴィシワジート君ならできるよ」とか「心配ないよ、大丈夫だよ」と励ましてくださり、失敗しながらも少しずつ自信が持てるようになったのです。そのように私をまるで家族のように大事に接してくださった皆さんのお陰さまで、2年間の学林生活を楽しく過ごすことができ、今、感謝と感動で胸がいっぱいです。

学林では仏教や法華経を研鑽されたと思いますが、いちばんの学びはなんですか？

私がいちばん感動したのは仏教の根本の教えである「縁起観」です。私たちは日頃、何か問題や困ったことが起きると、つい自分以外のものに原因を求めて、相手の人や周りの環境の責任にしてしまうことがよくあります。でも、それではすこしも状況は変わりません。今、自分がどのような心になって、目の前の出来事を善き縁としていけるか。人間関係で言えば縁である相手は変えられないわけですから、因である自分を変えることが大切になるわけですね。縁起の教えをとおして、幸せになるカギを握っているのは「すべて自分」ということを教えていただきました。



学林の講師や同期と共に（法輪閣、右から二人目がヴィシワジートさん）



インタビューに答えるヴィシワジートさん

卒林研究発表会では『インドのカースト制度と仏教におけるアンベードカル博士の役割』というテーマで発表されましたが、このテーマを選んだ理由を教えてください。

カースト制度はヒンドゥー教の信仰に基づいて、何世紀にもわたってインドの社会に根付いている身分制度です。インドの憲法ではカースト制度は違法とされていますが、あくまで憲法の規定は「差別をなくす」ことが目的で、カーストそのものは習慣として残っています。そのため、いまだに下位の身分に対する差別は根強く、教育、経済、社会、文化などに大きな影響を与え、対立や争いの原因、犯罪の増加にもつながっています。私はカーストがインドに存在する限り、国が発展することも平和になることも難しいと考えています。

カースト制度の最下層に属するダリット（不可触民）の家庭

学林は「実践的仏教」と「諸宗教対話・協力」のためのグローバルトレーニングセンターです。仏教、法華経に基づく全人教育を通して、実践的仏教の指導者をはじめ、国際宗教協力、平和構築などに従事する国内外のリーダーを養成しています。



学林ウェブサイト

に生まれ、カースト制度を乗り越えるために仏教に改宗し、法務大臣としてインド憲法の起草に貢献したアンベードカル博士の思想と行動について考察し、さらに法華経に説かれている「すべての人間は、皆尊くかけがえのない存在である」「人は皆、仏になれる」という平等思想や人間尊重の教えについて研究したいと考えたことから、このテーマを選びました。

帰国後、研究の成果をどのように具体化し、行動に移す予定ですか？

私の住む地域にはダリットのコミュニティーがあります。ダリットは長い歴史の中で、屠畜や汚物処理などの危険で人が嫌がる職に就き、住む場所、通る道、水汲み場、参拝できる寺院など、社会生活の中で上位カーストから分離されてきました。子どもたちは教育の機会に恵まれないために読み書きすらできず、児童労働に従事させられたり、物乞いやゴミ収集などをして生活している子どもが多く、犯罪も日々増加しています。ダリットの人々は今もインド全土で差別を受け、社会的地位を向上させようという試みも激しく弾圧されています。私はこのようなインド社会の差別に対する考え方を考えるため、子どもたちの教育支援に力を注ぎ、カースト差別と闘う人々と共に、よりよい社会を目指した変革を起こしたいと思っています。

そのために仏教や法華経、開祖さまの教え、アンベードカル博士の精神に基づいて、①カーストによって差別されないすべての人々と宗教を尊重する、②下位カーストの子どもたちへの教育支援、③異なったカーストや宗教間の交流と対話の促進——などを計画しています。そして、学林で学んだ「すべての人を尊重する」という仏教や法華経の教えを、多くの人たちに伝えていくつもりです。具体的な行動としては、身近にいるダリットの子どもたちに文房具を提供し、勉強を教えてあげたり、一緒にゲームなどをしながら、ふれ合っていきたいと思っています。子どもたちは教育を受けることによって、自分が本来持っている基本的な権



2024年3月24日、自宅で行なわれたブッダガヤ法座の会員とのご供養で導師を務めるヴィシワジートさん



学林生の仲間と育てた稲を収穫して(右から三人目)

利について学び、人間的に成長することができると思っています。

また、クリケットやサッカーなどのスポーツをとおして、異なったカースト間の交流を図ることもできますし、一緒に植林などのボランティア活動をすることで、互いに理解を深め、良好な関係を築くこともできます。しかし、こうした活動は一人ではできないことです。まずは立正佼成会ブッダガヤ法座の皆さんの協力を頂きながら、少しずつ同じ考えを持つ仲間を増やしていきたいと思っています。

法華経の中で心の支えにしている教えはありますか？

法華経の五百弟子受記品に説かれている富楼那の「半歩主義」が最も心に残っています。富楼那は人々をお釈迦さまの教えに導くとき、半歩先を歩いてリードする姿勢に徹したことで、人々は富楼那に親しみを感じながらも彼を信頼してついていきました。私も学林で勉強したことを生かし、帰国してからはブッダガヤ法座の皆さんと一緒に学び、行動し、できれば富楼那のように半歩先を歩みながら、共に成長できるリーダーになりたいと思います。

最後に将来の夢を聞かせてください。

インドにはヒンドゥー教をはじめイスラム教、キリスト教、仏教など、さまざまな宗教があります。とても大きな夢なのですが、これからはインド国内で諸宗教対話と宗教協力を進める活動をしていきたいと思っています。そういう気持ちになったのは昨年、学林の他教団練成で京都に行き、天台宗総本山の比叡山延暦寺を訪問したことがきっかけでした。

1987年8月、当時の山田恵諦お座主さまや開祖さまが中心となって、「比叡山宗教サミット」が開催されたことを初めて知り、開祖さまが宗教協力を捧げられた情熱と行動を自分なりにどう継承していけばよいか考えました。将来は、宗教者がお互いに理解し合い、認め合いながら進めている諸宗教対話と宗教協力の発展に向けて、私自身がその手足となって、インドの平和、世界の平和のために少しでも貢献していきたいと思っています。

まんが立正佼成会入門

会員になったら

手を取り合って（手どり）

教えがすばらしくても、入会しただけでは幸せになれません。教えを生活に生かすことが大切です。そのために先輩会員が新入会員を手をとるように教えることを「手どり修行」といいます。

新入会員も先輩について歩けば、いろいろと教え

てもらえます。相手からの質問によって、自分の勉強不足にも気づけますし、学ぶことができます。

また、出会った人の考え方を聞き、すがたを見ることで、自分をふり返ることもできるのです。



豆知識

立正佼成会には「入会者即布教者」という考え方がある。それは、入会した日から人の喜ぶことをしたり、先輩から教えられたことを伝える役目があるということだ。先輩たちと「手どり修行」に歩いてみよう。

『まんが立正佼成会入門』は、佼成ショップにて好評発売中です。

<https://www.koseishop.com/>

教えを学び実践する (法座・ご法の習学)

教会などで人びとが輪になって座り、仏教に基づくものの見方を互いに学び合うのが「法座」です。

立正佼成会では法座を大切にしています。それは、仏さまの教えを実践して幸せになった人が体験を話したり、悩みをかかえた人が教えを聞ける場だからです。

また、仏さまの教えを学ぶとともに、学んだ教えを絶えず自分の日常生活に照らして考えることが「ご法の習学」です。

この「法座」と「ご法の習学」を繰り返し行なっていくなかで、人格を高めることができるのです。



豆知識

もともと「法座」とは、お釈迦さまがお座りになる席や、説法をする人が座る一段高い席のこと。また、教えが説かれる場所やその集まりを意味していた。



お役のある人

「仏との縁」を説く法華経

立正佼成会開祖 庭野日敬



今回は初信の方々のために、私たちと仏さまとの「ご縁」についてお話ししましょう。
いまから千四百年ほど前の中国で、法華経の教理を整然と説き明かして「小釈迦」と呼ばれたのが天台大師智顛でした。その天台大師が修行中のころに、こんなことがありました。

あるとき、南岳大師慧思という高僧が、光州（河南省）の大蘇山にいることを知って、天台大師は戦乱のなかを必死の思いでその山を訪ね、弟子入りを願い出たのです。そのとき南岳大師は、若き天台大師をひと目見るなり、こういったといいます。

「昔、靈鷲山で、そなたと一緒に法華経を聞いた。その宿縁が熟して、そなたはいま、私のところにやってきたのだ」

靈鷲山というのは、お釈迦さまが法華経を説かれた山です。「宿縁」というのは、前世からの因縁のつながりということです。

ところで、天台座主の山田恵諦猊下と、中国佛教協会会長の趙樸初先生は、私が最も尊敬する仏教者の先達ですが、昭和六十二年の夏に、私は両師と丸三日間というもの、朝から晩まで法華経の話をして過ごすことができました。そのとき趙樸初先生は確信をこめ、そしてうれしそうに何度もこういわれたのです。

「こうして三人で法華経の話をしていると、とても楽しい。釈尊が靈鷲山で法華経を説かれたとき、私たちは一緒にその説法を聞いていたに違いありません」

私は一瞬びっくりしたのですが、よく考えてみると、この世で心の底から信じ合える人間同士というのは、前の世から何かの「縁」で結ばれているのだということ、つくづくとかみしめさせられる思いがしました。

私たちが帰依する法華経は、「授記経」といわれています。「授記」というのは、お釈迦さまが弟子たちに「そなたは将来、必ず仏の悟りを得るであろう」と、成仏の保証を授けることです。そして法華経には、大勢の弟子たちに対する成仏の保証が、繰り返し繰り返し説かれているのです。

また、法華経は「歴劫修行の経」といわれています。「歴劫修行」というのは、人間は何度も何度も生まれ変わって修行を続けることによって、ついに仏となるということです。

私はその二つに付け加えて、法華経は「仏との縁を教える経」といいと思います。初めから終わりまで、仏さまとの深い「縁」について述べているからです。

庭野日敬平成法話集 1『菩提の萌を発さしむ』P.53-55

球根の生命力

国際伝道部長
赤川 恵一

みなさん、こんにちは。瞬く間に一年の半分が経過し、日本では暑い夏がもうそこまでやってきています。

さて、今月は「永遠のいのち」についてのご法話を頂きました。佼成会では「生き通しのいのち」などとも表現します。「永遠のいのち」を受け継いでいる私たちだからこそ、一人ひとりが生命を尊んで生きて参りたいと思います。

昨年、私は本会会員の知人から夏に咲く花の球根を頂きました。しかし保存状態が悪かったためかカラカラに乾燥させてしまい、慌てて水につけたところ、今度はカビを生やしてしまうという最悪の事態に見舞われました。半ば諦めながらも春の訪れを待ち、その球根を我が家の庭に植えてみました。すると、植えたことを忘れかけていた5月下旬、可愛らしい双葉が二つも顔を出して私に微笑んでくれました。驚いたことに、枯れてしまったと思っていた球根には、「いのち」が宿っていたのです。私はその生命力に大変感動致しました。

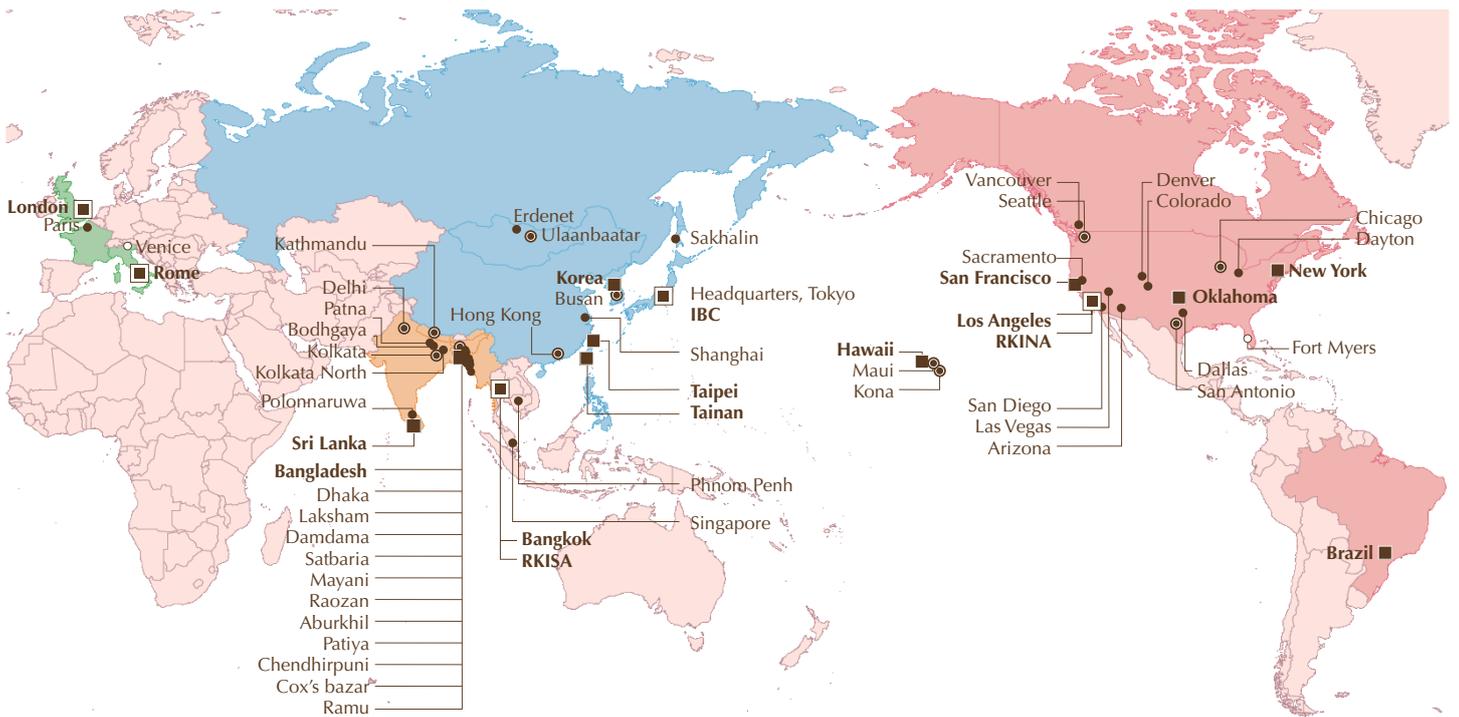
ご法話の中で、会長先生より生命のバトンは永遠に引き継がれると教えて頂きました。私も、大いなるいのちの営みのなかの一区間を走るリレー走者として、この球根のように力強く生き、堂々と次の世代にバトンを手渡せるように精進させて頂きます。



2024年3月19日、ヒルデブランド靖子元オクラホマ教会長の自宅を訪ねて（左から、赤川部長、ヒルデブランド元教会長、クリス・ラドソーオクラホマ教会長）



🌸 *A Global Buddhist Movement* 🌸



Information about
local Dharma centers

